

Lostbelt No. ■ 『暗黒  
魔竜大地 アレフガルド  
■に近き者』

ヨシヒコ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

それは、創世の最中の大地。

一つの選択がもたらした暗黒の空に、始まりの星が照らされる。

Lostbelt No. ■

『暗黒魔竜大地 アレフガルド ■に近き者』

FGOとドラゴンクエストのクロスオーバーとなります。

受け入れられる方のみ読んで頂ければと思います。

タイトル名を徐々に開示しています。

# 目次

第1話「プロローグ」	1
第2話「会合」	11
第3話「迎る者」	24
第4話「偽りの主従」	36
幕間の物語①「流離(さすらい)の剣士(セイバー)」	48

## 第1話「プロローグ」

『選ばれし君たちに提案し、捨てられた君たちに提示する』

暗闇に閉ざされた意識の中、突如として無機質な声音が響いた。

『栄光を望むならば、蘇生を選べ』

蘇生。その言葉に混濁していた記憶が僅かに甦る。

人理を救うために同士とともに歩み出した時に——否、最初の一步を踏み出すことも許されずに、俺達は無慈悲な業火に焼き尽くされたのだ。

何も成し遂げる事を許されず、意味もなく死んだ。

『怠惰を望むなら、永久の眠りを選べ』

生か、死か、迫られる選択。

大概の人間であれば生き返る機会があれば迷いなく手に取るだろう。だが魔術師として生きてきたからこそ、これが無思慮に頷いていい提案でない事も分かる。

(貴様は何者だ？なぜ俺をわざわざ生き返らせようとする？目的は何だ？)

『……………』

俺の並べる問いにその者は何も答えることはない。

『神は、どちらでもいい』

一方的に告げられるそれは、抑揚のない声音であるが此方に一切の関心がない事だけは充分に伝わる物言いであった。

（——神、か）

どうせ返事が返ってくることはないのだからと、彼は独り言を呟くかのように思考を始める。

（本当に神とやらなら人間の蘇生も容易いだろう……だが、わざわざ手間をかけるわりにこちらへの興味があまりに薄い）

冷静に客観的に、神を名乗る者の考えを汲み取る。

（つまり俺は、いや俺達はおまけという事だ。本命はキリシユタリアあたりか？）

『……………』

（大方、奴が貴様と交渉でもしたのだろう。そして競り勝った。ああ、それなら納得が行く。奴ほどのお人好しはそうはいないだろうからな）

キリシユタリア・ヴォーダイム。

彼が所属するAチームのリーダーである男。凡ゆる才が集まる時計塔において、若くして頭角を現した才人。多くの者がそんな彼に王者の風格を感じただろう。

だが彼だけは知っている。人より少しだけ多くギリシユタリアと接する機会のあった彼だけは、かの才人の内側を知っている。だからこそ他のメンバーよりも僅かに彼には推察の余地があつた。

(得体もしれず、自らを神などと名乗る輩の提案なら拒絶するところだが、奴が身を粉にして得た権利なら話は別だ)

自分達を翻弄するくだらない運命と神を名乗る者の傲慢な物言いへの苛立ちを乗せながら彼は姿の見えない神を睨んだ。

(いいだろう。不服だが貴様の提案に乗つてやる)

彼のその言葉を神を名乗る者は承諾と受け取つたのだろうか。

すぐさま彼の視界に広がつていた視界に光の筋が姿を現す。意識が現実への覚醒へと向かうのを感じながら彼は最後に自身の蘇生を行なつた者へ言葉を吐いた。

(――最後に、一つ言っておくぞ神とやら)

文字通り自身の命運を握っている相手へ向け忠告の言葉を述べる。

(あまり、"人間"を侮るなよ)

それだけを最後に告げ、彼の意識は光へと包まれていった。

これは、もう一人の秘匿者<sup>フリプター</sup>の物語。

Aチームのサブリーダーであるウィリアム・アードリックが紡ぐ、世界の未来を賭けた物語である。

◇◇◇

神を名乗る者——今は異星の神を称する者の蘇生を受けたウィリアムは、自身の果たすべき役割を説明された。

人類史から切り離された有り得ざる歴史の断片、ロストベルト異聞帯。そんな異聞帯を現実世界に縫い留める役割を持つ空想樹を根付かせ成長させる事が、異星の神より彼等に与えられた役割であった。

「しっかりと全員そろったようだね。分かってはいたが、みな負けん気が強い」

いつもと変わらぬ微笑を浮かべるキリシユタリアの前に、Aチームのメンバーであった七人が集う。全員が異星の神の提案である蘇生を受け入れこうして再会を果たした。「おうよ。あんな話をされて乗らないやつはいないだろう？ デカすぎる話は手に余るんだがね、断れば死ぬってんだから、ノーは言えないよなあ？」

軽口で返答した男は、ベリル・ガット。常に飄々とした態度を取っている彼であるがその立ち振る舞いは油断のならないものがある。



「……私は死んでも良かったけど、異聞帯ロストベルト、というのは無視できないわ。人類史は脆弱なものだけど、だからこそ、そんな揺らぎを許容していたのね」

冷めた様子の彼女の名は芥あくたヒナコ。常に無表情で他者とも距離を取っている彼女であるが、纏っている雰囲気には独特なものがある。

「……………何でもいいさ。面倒な話だが、チャンスは全員にある。いいさ。やってやるとも。とにかく世界を救えばいいんだろう?」

消極的な物言いをするのがカドック・ゼムルプス。悲観的な印象の強い彼であるがその実、反骨心が強くここぞと言う場面で力を発揮する男である。

「……………」

「——ッ」

ウイリアムがそんな彼等へと目を向けていると端で驚いた表情を浮かべている眼帯をつけた彼女と目が合う。

しかし視線を交差させた瞬間、両者は気まずげにすぐさま目を逸らす。そんな時、後方にいた男がウイリアムに声をかけてきた。

「少しいかしら、ウイリアム」

「ペペロンチーノか」

ウイリアムが振り返ると穏やかな笑みを浮かべた美丈夫が立っていた。彼の名はス

カンジナビア・ペロンチーノ。Aチーム最年長の人物であり、気さくな人柄からムードメーカーでもある。殺伐とした魔術師には珍しいタイプの人種であるが、どこことなく捉え所がない。

「後で話したい事があるの。時間を取ってもらえるかしら。とても大事なことよ」

「……………ああ、分かったよ」

「ふふつ、ありがとう」

そんな彼が珍しく真面目な表情で声をかけてきたため、不詳不精ながらウィリアムは承諾する。ペペロンチーノが自身に何を問い詰めようとしているかを察しているため、あまり本意では無いのだ。

やがて全員の様子を見守っていたキシユタリアは改めて場を仕切るように手を叩いた。

「——さて、現実での再会を祝いたいところだが、我々は既に競争相手だ。必要以上に馴れ合うことはない」

ここにいる一人一人が各自の異聞帯ロストベルトを管理する。そしてそのいずれかの世界がこの星の新たな未来となる。それゆえに異聞帯ロストベルトが成長していけばいずれは他の異聞帯ロストベルトと衝突し合い、脆弱な世界は吸収される。そうキシユタリアはウィリアムに説明をした。

(……………だがそれだけでは結局、異星の神が何をしたいのかはわからんがな)

「——じき、異星の神の使徒が来る。彼等の手で担当する異聞帯ロストベルトへ向かってくれ」

再会もほどほどにAチームのメンバーは各自の異聞帯ロストベルトへと向かう。

ウイリアムもまた自身に与えられた異聞帯ロストベルト。アフリカ異聞帯へ異星の神の使徒と呼ばれるサーヴァントの力を借りて移動するので合った。

◇◇◇

そこは、星も月も太陽の輝きすらも届かぬ暗黒の空。

そこは、古き神代をも凌駕する魔力マナに満ち満ちている領域。

そこは、数多の巨獣の群れが闊歩する大地。

まともな人類が生存する事すら不可能な世界。

そんな地に、一人の魔術師が降り立った。

「全く……これのどこが、あり得たかも知れない人類史だ」

呆れた様子で呟くウイリアム。その足下には、絶命した黒鱗の竜種の姿があった。しかも一匹だけではない、折り重なった死体の山は十を越えている。しかし、ウイリアムには返り血一つすら付いていない。

「それに、あの神父め。降りる場所はどこでも良いと言ったが、よりにもよって竜種の巢



(——とりあえず、召喚は成功したな)

目を閉ざしているウイリアムだが、面前に新たな魔力の反応を感じとり、最初の自身の仕事が無事になされた事を理解する。

やがて光が落ち着きウイリアムはゆっくりと目を開き、自身のサーヴァントとなる英霊を見た。

(——！)

そこに立っていたのは、人とは思えぬ青白い肌でありながら、不思議と惹きつける雰囲気を持つ女。

だが、それ以上に印象的なのは彼女の宝具であろう武器。先端が紅の宝玉を加えた鳥の姿となつている長杖。禍々しさと神聖さを兼ね備えたそれは、側から見ても強力な神祕である事が明らかであった。

「悲しいわ。この姿の私を呼ぶなんて運が無いのね、貴方」

それは自身のサーヴァントとしての実力を疑つての言葉では無い。自身の存在そのものへの悲嘆にも、嘆きにも似た何かにウイリアムには聞こえた。

「それはお前が決めることではない。マスター他がこれから判断することだ」

「ふうん……そう、変わった人ね」

ウイリアムの返答に女は僅かに驚きを見せる。

「俺の名は、ウイリアム・アードリック。お前の真名<sup>名</sup>を聞きたい」

「あまり名乗りたくは無いのだけれど、まあ、いいわ。私の名は——」

これにて契約は成された。

二つの影が、暗黒の大地を踏みしてゆく。

目指す先は異聞帯<sup>ロストヘルト</sup>の中心地、魔の島に築かれた巨城。

この世界の王との謁見である。

## 第2話 [会合]

ロストベルト  
異聞帯。

それは、何らかの理由により発展の可能性が閉ざされ、抹消された人類史である。

しかし今、地表には八つの異聞帯ロストベルトが生じている。本来、存在しないはずの世界が出現している要因は主に二つある。

一つは、汎人類史と呼ばれる、これまで正規の歴史を歩んできた文明が、白紙化された地表から消失したこと。これにより異聞帯ロストベルトは自らの存在を置く土壌を得た。

もう一つは、異星の神により与えられた空想樹ロストベルト。その力により歪で不安定だった異聞帯ロストベルトが地表に根付き、その存在を確立することができた。

それから三ヶ月が経ち、状況は新たな局面へと動き出す。

◇◇◇

「空想樹の発芽から90日……三ヶ月もの時間が経過した。

ろかいぶんしげんしやう  
濾過異聞史現象——

異聞帯ロストベルトの書き換えは無事、終了した。まずは第一段階の終了を祝おう。これも諸君らの尽力によるものだ、と」

劳いの言葉をかけるキリシユタリアの視線の先には、ホログラムとして姿を映す七人のクリプター達の姿があった。

『うん？そいつは大げさだ、キリシユタリア。俺たちは誰も労われるようなことをしちやあいない。宇宙ソラからの侵略も、テクスチャの書き換えもぜんぶ『異星の神』さまの偉業だからな。俺たちがしたコトとさえ、異聞帯ロストベルトの王のご機嫌取りだけさ。本番はこれからだろう？』

『（ご機嫌取り……か、言い当て妙だ。ああ、まさしくその通りだよ）』

ベリルの言葉を受け、ウイリアムは自身の異聞帯ロストベルトに鎮座する王の姿と現状の自身の立ち位置を思い出し、内心でため息をつく。

『……分かっていないのねベリル。異聞帯の安定と“樹”の成長は同義よ。キリシユタリア様は異聞帯ロストベルトのサーヴァントとの契約と、その継続に全力を注げと言っているのです。アナタのように、まだ遊び気分が抜けていないマスターに対して』

『おいおい、睨むのは勘弁だぜオフエリア。おまえさんの場合、シヤレになつてないだろう？』

飄々としたベリルの物言いに、オフエリア・ファムルソーネが釘を刺すように忠告



する。何事にも真面目なオフエリアとベリルの性質はあまり相容れないのだ。

『……というか、キリシユタリア様、ね。目が醒めてから随分な変わりようで。ま、こんな状況だ、誰かに縋りたい気持ちも分かる。それに、あまりおまえさんを揶揄うとこの保護者サマも黙ってないだろうしな』

『——ッ！』

『……………』

ニヒルな笑みを浮かべるベリルがウイリアムの方へ視線を向ける。その言葉にキツとベリルを睨むオフエリアだが、肝心のウイリアムが涼しい顔であった。そのため、ベリルは僅かにつまらなそうな表情を浮かべてから話を戻す。

『ただ、誤解だけは正しておこうか。俺はかつてないほど真剣だよ、お嬢さん。なにしろ一度死んだ訳だしな？遊び気分ではいられるほど大物じゃあない。こうして蘇生に成功したものの、異星の神とやらの恩情が二度あるとは思えない』

先ほどまでとは一転して真剣な表情を見せるベリル。まるで鋭利な刃物のような雰囲気。先程まで忠告の言葉を述べていたオフエリアも押し黙る。

『なら、生きているうちにやりたい事はやっておきたい。殺すのも奪うのも生きていてこそその喜びだ。——なあ。あんたもそう思うだろ、デイビット？』

『同感だ。作業のような殺傷行為は、コフィンの中では体験できない感触だった』

ベリルに話を振られ、静かに口を開いたのがデイビット・ゼム・ヴォイド。キリシュタリアとは別種の天才であり、魔術師の中でも更に人並外れた独特の感性を持ち合わせている。

『オレの担当地区とガット、そしてアードリックの担当地区は原始的だからな、必然その機会は恵まれる』

『そうとも、オレ達にその気がなくても向こうから殺されに来る。遊んでなんかいらねえよな』

『……俺は好き好んで殺しているわけではないがな』

殺しが趣味のようなベリルと同一にはされたくないと思いついりアムはデイビットの言葉に苦言を述べた。

『……………』

『あら、平常運転のベリルに比べて、元気がないんじゃないカドック？目の隈とか最悪よ？寝不足？それともストレスかしらね？』

『……その両方だ。僕の事は放っておいてくれ。仕事はきっちりこなしているんだから』

気にかけるペペロンチーノに煩わしそうにカドックは言葉を返す。

『それはちよつと無理ね。すごく無理。放ってほしいのなら、せめて笑顔でいなさいな。』

友人が暗い顔でいたら私だって暗くなる。当たり前のことでしょう？私は私の為にアナタの心配をしちやうのよ。アナタの事情とか気持ちと関係なくね』

カドツクの担当するロシア異聞帯は過酷な環境下にあり、決して良い状況とは言えない。元々、Aチームの他のメンバーに魔術師としての劣等感を少なからず感じている彼だからこそ、一人で抱え込み過ぎないようにペペロンチーノは一層世話を焼いているのだ。

『分かる？独りでいたかつたら、それに相応しい強さを身につけないと。ストレスが顔に出ているようじゃまだだよ。何か楽しいことで緩和しないと』

ペペロンチーノのその言葉に思うところがあつたのかカドツクは僅かに下を向く。

『そうねえ。定番で悪いけど、お茶はどう？こっちの異聞帯で、いいお茶の葉を見つけたの。アナタのところにも分けてあげるわ。皇女様もきつと喜ぶわよ？』

『……余計な気遣いだ。こんな世界になってもアンタだけは変わらないな、ペペ』

ペペロンチーノの提案を強がったような笑みで断るカドツク。そんな彼の様子にペペロンチーノは一度微笑を浮かべてから声高く反応した。

『きゃー、褒められちゃったわー！いいわ、殺し文句にしては中々よカドツク！』

『違う、呆れているんだよ……まったく。遊び気分ならここに特大のがあるぞ、オフエア』

ペペロンチーノの反応にカドツクは大きいため息を吐いて反論するのを諦め、オフエリアへ言葉を投げた。

『それは……いい、いえ。ペペロンチーノは例外です。彼はこれがデフォルトでしょう』

『……無駄話はそこまでにして。キリシユタリア、用件はなに?』

これまで静観していたヒナコがいい加減、話を進めるとばかりにキリシユタリアに問いかけた。

『こちらの異聞帯ロストベルトの報告は済ませたはず。私の異聞帯ロストベルトは領域拡大に適していない。私は

貴方たちとは争わないこの星の覇権とやらは貴方たちで競えばいい。そう連絡したわよね、私?』

『……そんな言葉が信用できるものか。閉じこもつても争いは避けられないぞ、芥。最終的に、僕たちは一つの異聞帯ロストベルトを選ばなければいけない。アンタが異聞帯ロストベルトの領域拡大を放棄しても、そのうち他の異聞帯ロストベルトに侵略される。それでいいのか? 座して敗者になつてもいいと?』

ヒナコの言葉にカドツクが不審げに疑問を呈する。

『……別に。私の異聞帯ロストベルトが消えるなら、それもいい。私はただ、今度こそあそこにいたいだけ。納得の問題よ。それができればほかのクリプターに従うわ』

(……そんな表情もするんだな、芥)

彼女の意思が固いことは側から見ても明らかである。Aチームとしてそれなりの時間を過ごしているウイリアムも彼女がここまで強い意思を示すのを初めて見たため、少なからず驚いていた。

『異聞帯の勢力争いに興味はない、か。まあ、結果が見えてるゲームだからなあ、コイツロストベルトは。オレたちは束になってもキリシユタリアには及ばない。地球の王様決めゲームはほぼ出来レース状態だ』

(力量差を理解している割に、ほほ、と付けるあたりがお前らしいがな)

呆れているような物言いのベリルであるが、その内側にチラつく僅かな野心をウイリアムは見逃さなかった。

『オレやディビット、ウイリアムのところなんざ酷いもんだしな？あれのどこが有り得たかもしれない人類史なんだよ。その点、キリシユタリアロストベルトの異聞帯は文句なしだ。下手をすると汎人類史より栄えている！ずるいな、初めからエコ最良されてるときた。やつぱり生まれつき高貴なヤツは運が違うぜ！』

「……………」

羨むベリルの言葉を受けてなお、キリシユタリアは目を閉じ静観を貫く。

『お前の意見も一理あるな、ベリル』

ウイリアムという意外な方向からのフォローに思わず発言をしたベリルも目を見開

いて驚きを示す。

『だが、異閨帯ロストベルトの王に力を示し、盟友として迎えられたのは紛れもなくキリシユタリアの實力によるものだ。俺たちの誰であつてもそのような偉業を成し遂げることはできないだろうが——』

キリシユタリアの担当するギリシャ異閨帯。彼の地の王、全能神と称される神にキリシユタリアは一対一で打ち勝ち、今の地位を得たのだ。

ウイリアムの結論を分かりきつていたかのように詰まらなそうに口を尖らせるべりル。そんな彼の様子を見て、ウイリアムは一言余分な言葉を付け足す事を決める。

『——だが、それでも更々負けてやるつもりもないがな』

ウイリアムとキリシユタリアの異閨帯ロストベルトには文字通り天地の差があるが、内包する戦力にはそこまで差はないと彼は考えていた。

そんなウイリアムの言葉に、キリシユタリアは臉を開き仄かな笑みを浮かべる。

「ああ、その時が来れば私も全力で相手をしよう。——さて、遠隔通信とはいえ、私が諸君らを招集したのは異閨帯ロストベルトの成長具合を確かめる為ではない。1時間ほど前、私のサーヴァントの一騎が『靈基グラフ』と『召喚武装ラウンドサークル』の出現を予言した」

キリシユタリアの述べた報告に、空気が僅かに引き締まる。

「靈基グラフはカルデアのもの。召喚サークルはマシユ・キリエライトの持つ円卓だろ

う。南極で虚数空間に潜航し、行方を晦ましていた彼らがいよいよ浮上する、という事だ」

『(……やはり生きていた、か)』

人理継続保障機関フィニス・カルデア。

それはかつてAチームの面々が所属していた組織であり、世界の未来を救うための機関である。

だが、異星の神による蘇生を受け入れクリプターとなった彼らにとつて、カルデアは紛れもない敵となった。

約三ヶ月前、異星の神の手によつて地表が白紙化される際、同時並行で彼らの戦力の一部がカルデアを叩いた。だが、かつてAチームの同僚であつた少女と彼らの代わりに世界を救つたマスターを仕留め損なつた。

『……死亡していなかったのですね。三ヶ月の間、虚数空間に漂つていたというのに……』

『そうね、せっかくコヤンスカヤが魔術協会に手を回して、扱いやすい新所長まで動員したのに。人選、間違えたんじゃないヴォーダイム？ 私のサーヴァントだつたら基地ごと壊せていたわよう？』

『……………』

ペペロンチーノの指摘に、自身のサーヴァントを遣わしたカドックは不満げな表情を見せる。

「いや、あれが最適解だった。カルデアの護りは強固ではないが万全だ。レイシフトで対応されないためにも制圧にはまず内側から潜入し、カルデアスを停止させる必要があつた」

レイシフト、人間を擬似靈子化させ、異なる時間軸、異なる位相に送り込む空間航法。その肝であるカルデアスを封じる事が最も確実性の高い手段であつたのは間違いない。だがそれでも、彼等は逃げ延びてみせた。

「コヤンスカヤの計画は良く出来ていた。問題があつたとすれば——あのサーヴァントが積極的に働かなかつた事だ。だが、それはカドックの責任ではない。あの神父やコヤンスカヤは我々のサーヴァントでは無いのだから」

『……それで。連中がどこに出るのかは判明しているのか』  
話を変えるようにカドックが尋ねる。

「そこまでは予言されていない。あと数時間でこちらに出現する、という事だけだ」

『なんだいそりゃ。じゃあ各自、自分の持ち場で警戒しろって——』  
『出現場所はロシアだ。異聞帯ロストベルトの中に浮上する』

ベリルの言葉を遮り、デイビットが断言する。



『……それは、なぜ?』

『?』 何故もなにも、道理だろう。彼等が“今の地球”で知り得る事象はカルデアを襲ったサーヴァントだけだ。虚数空間から現実に出るための“縁”はそれしかない。殺戮獵兵は彼等にとつての座標でもある』

『……ふん。因果応報とはね。やられたやり返せ、だ。ヤツらにとつちや、僕は真つ先に倒すべき敵つてワケだ』

当然だろうとばかりに少ない情報で優れた推察を見せるデイビット。その言葉を受け、自身が仇敵と定められた事実にかドックは不愉快そうに顔を顰めた。

『カドック。俺の契約したサーヴァントの力なら異聞帯を渡り手を貸すことも——』

『必要ない。お前は自分の異聞帯ロストベルトに引っ込んでろ。僕は僕自身の手でヤツらを倒す』

助力を提案しようとしたウィリアムであるが、はつきりと拒絶されてしまう。劣等感の強いカドックにしては珍しい強気な物言いにウィリアムも僅かばかり目を見開いた。

『ま、本人がやる気になつてんだから茶々いれるのも粋じゃねえか。踏ん張れよカドック。皇女サマへの男の見せ所だしな』

『——異星の神による侵略が終わつた今、カルデアの抹殺は余分な仕事だ。雑務といつても差し障りない。しかし、障害である事も否定できない。なにしろ世界を覆すのに慣れている連中だ』

キリシユタリアによるカルデアの評価。状況が状況であるゆえにそれは決して高いものではないが、油断のできない相手である事もまた事実であった。

『……アンタに言われるまでもない。僕だつて負けるつもりはないからな』

それだけを述べ、カドツクは通信を切る。

『私も玉座に戻るわ。こちらの王は探究心と支配欲の怪物だから。放つておくと、どんな展開を望むか分からない』

『んじゃ、オレもこのヘンでロシアからSOSがあつたら報せてくれ』

キリシユタリアの報告が終わり、ヒナコやベリルと続々とこの場を後にしていく。更に、僅かな会話をしペペロンチーノやデイビットも通信を切つた。

『……………』

最後にこの場に残つたのは、オフエリアとキリシユタリア、ウイリアムであつた。

『ウイ……………いえ、アードリック。会合はこれで終わりです。貴方も持ち場に戻りなさい』  
『ふつ、すっかり副官が板についたな。だが、この場を去るのはお前の方だ。俺はキリシユタリアに個人的な用事がある』

ウイリアムの物言いにオフエリアの青い瞳が鋭さを増す。

『な……………！私……………っ！』

「すまないオフエリア。私からも頼みたい」

『……分かりました。では……これで、失礼します。キリシユタリア様』

キリシユタリアの言葉を受け、戸惑いながらもオフェリアは通信を切った。

二人となり、僅かな静寂を挟みキリシユタリアの方から口を開く。

「——それで、話とは何だ。ウイリアム」

『ああ、時間を取らせて悪いな。だが、このまま話すのもアレだし、——』

そう述べウイリアムの通信用のホログラムが消失した。そして、キリシユタリアの真正面に用意された席に——。

「——面と向かって話でもしようか」

突如として面前に現れたウイリアムの姿に、さすがのキリシユタリアも驚きを隠さなかった。

## 第3話「辿る者」

こうして実際に向かい合うのは約三ヶ月ぶりであるウイリアムとキリシユタリアであつたが、最初に動き出したのはその二人ではなく、キリシユタリアの隣で霊体化して待機していたサーヴァントであつた。

「——死ねッ!!」

彼女は、ウイリアムへ向け一切の反応を許す事なく迫り、その喉元を穿たんと神速の突きを放つ。だが、更に現れた刺客によつてその軌道は阻まれた。

白き槍に黒き杖が円卓の中央で交差する。

「悲しいわね。会話もまともに出来ないケダモノが、私と同じサーヴァントだなんて」

「——テメエ………！ いったい何処から現れやがった!?!」

現れたのは、ウイリアムの横に控えていたサーヴァント。卓越した魔術の腕により、同じサーヴァントにも悟られる事なく霊体化していたのだ。ちなみにウイリアムも彼女の魔術によつて先程まで姿を消していた。

拮抗していたかに見えた両サーヴァントの鏖迫り合ひであつたが、徐々にキリシユタ

リアの槍兵が押し始める。

「ハッ！そんな細腕でオレを止められると本気で思ってたのかよッ！」

「——【攻伐せよ】」

「——ッ!？」

彼女が極小の詠唱を唱えた瞬間、杖を持つ腕の力が増し加わる。

あまりの力の上昇に対応できず、押し込んでいたはずの槍兵の側が呆気なく弾かれた。

「ふふ、地に伏している姿の方がお似合いよ」

円卓の上の空間で静止したままの杖使いは、地に膝をつける槍使いを見下すように嘲笑う。

「……………殺す。殺してやる。今すぐ、テメエを——」

「——そこまでだ、カイニス」

白き槍兵は怒りに体を震わせ、その美しい青き瞳が獰猛な紅に染まる——かに見えたが、その直前に主人であるキリシユタリアが制止した。

「キリシユタリア……………！テメエ、このオレに指図するつもりか……………!？」

「君こそ、このような無意味な戦いで死力を尽くすつもりかい？それに、君には事前に伝えた役目があるはずだ。なるべく早くそちらに向かつてほしい」

「——チツ……」

キリシユタリアの冷静な物言いに、カイニスと呼ばれた槍兵は、仕方ないとばかりに構えていた槍を下ろした。

「……護衛はいらねえのかよ」

「必要はない。彼等は私達と決闘をするために来たのではないのだから。そうだろう、ウイリアム？」

「ああ。その通りだ。——キャスター。俺は指示を出すまで姿を見せるなど言った筈だが？」

キリシユタリアの言葉に応じたウイリアムは、自身の召喚したサーヴァントへ向けて問い直す。

「悲しいわ。私はマスター<sup>貴方</sup>を助けたつもりだったのに」

「その必要はない、と言うことは事前に伝えた筈だ」

「あら、そうだったの？私、あまり物覚えがよくなって」

「……全く。どの口が言ってるんだか」

幾つもの魔術を習得している魔女の記憶力が乏しい訳がない。この三ヶ月で再三、彼女の万能的な魔術の才を見せてつけられてきたウイリアムは呆れたように答えるのみで、自身のサーヴァントを咎めるのを諦めた。

「——ところでウイリアム。先ほど、君のキャスターが行使した魔術が例の古代魔術エンシエントなのかな？」

「ああ。『呪文』とも言われる、ほぼ全てが僅か一小節の詠唱で引き起こす神秘。手の平サイズの火球から大地を焦がす炎の海まで、うちのキャスターなら容易く引き起こせる」

エンシエント  
古代魔術。

神代の最奥、原初のマナに満ちた世界で用いられてきた魔術。時計塔にもその存在こそ情報として伝えられているが、現代のマナでは再現不可能なため、魔術師達の中でも信憑性を疑われている存在であり、流星のキリシユタリアでも興味の惹かれるものであった。

そんな魔術の説明のためとは言え、自身のマスターより賞賛を受けたキャスターは満更でもないドヤ顔を見せている。

「……おい、杖使い女。一つ問う」

キリシユタリアの隣に立つカイニスが、キャスターへ鋭い視線を向ける。

「——テメエは、『神』か？」

カイニスの問い。

先程の一瞬の攻防で、彼女はキャスターから発せられる特殊な『神性』を感じとつて

いたのだ。

「……………まあ、そうであるとも言えるし、そうでないとも言えるわね」

「……………」

黙考の末にキャスターから発せられたのは曖昧な答えであった。その答えに、キャスターの事情を知るウイリアムは少しだけ悲しげに顔を顰めるのであった。

「——そうか。なら、オリュンポス<sup>此</sup>でのゴタゴタが終わったら、いの一<sup>知</sup>番にテメエの首を刎ねてやるぜ。キャスターのサーヴァント」

だが、そのような微妙な答えでもカイニスには関係がない。本人が、<sup>そうであると</sup>神だと認めるのなら、彼女の標的になり得る。

そんなカイニスの宣戦布告にキャスターは不敵な笑みを浮かべた。

「——ええ。とても良いわ、それ。その時は私も全霊を持って貴方を呪い殺すわ、神霊力  
イニス」

「ハッ！ やれるもんならやってみやがれ！」

受けて立つと言うキャスターの言葉に、獐猛な笑みを浮かべるカイニス。彼女は「オレは行くぞ」とだけキリシユタリアに告げ、そのまま霊体化しこの場から去って行った。

カイニスが消えた事を確認したキャスターも「私も姿を消しておくわ」と述べ、ウイリアムの返事を待たずして霊体化した。



「お互い、サーヴァントとの付き合い方には苦労させられているようだね」

「全く……お前こそよくあんな狂犬の首輪を繋いでいられるな」

両者のサーヴァントの勝手極まる言動に、苦笑いを浮かべるキリシユタリアと頭を抱えて呆れるウイリアム。

先程まで殺気を撒き散らしていた者達がいなくなり、急激に静かになった室内でウイリアムはゆつくりと口を開いた。

「悪かったな、連絡も無しに」

「いや、それは特に問題はないよ。ただ、君がこのようなサブライズをする事は少し意外だったかな。ちなみに此オリュンポス処にはどうやって？」

戯けたように述べるキリシユタリアの言葉に、ウイリアムはため息を吐き、彼の疑問に答える。

「コヤンスカヤと交渉してな。俺の異聞帯ロストベルトで契約した「ライダー」の手を借りれば力業で異聞帯間を渡ることは出来るが、そんな事をすれば異聞帯セウスの王が黙ってないだろ」

「……君が、二騎目に契約を果たしたというライダーか。先程のキャスターと言ひ、クラス名すら教えてくれない三騎目のサーヴァントと言ひ、私がカイニスの真名を教えたのだから、君も少しは情報を開示してくれても良いと思うんだが」

さりげなく探りを入れるキリシユタリア。ウイリアムは相変わらずな抜け目がない

彼に苦笑いを浮かべる。

「言つても分からんだろ。考古学<sup>アステア</sup>科の連中ですら懐疑的な時代の英霊だ。それに、情報はできる限り絞っておきたい。何処で聞き耳を立てている奴がいるかもわからんからな」

「クラス名も、か」

「ああ、三騎目のアイツに関してはダメだ。あれは、俺のところの王にとって現状、用意の出来る最大の鬼<sup>ワイルドカード</sup>札だからな。もしもの局面までは、悟られたくない」

ウイリアムの言う、もしも。自身の異聞帯の王と敵対する可能性を考慮し、三騎目は完全に秘匿をしている。そもそも交渉のテーブルに着くまでも苦勞した相手なので、異聞帯<sup>ロストベルト</sup>にとつての最悪の事態も想定していた。

「……そんな話をしに来た訳じゃない。キシシュタリア、お前に一つ提案がある」  
話題を仕切り直すウイリアム。

真つ直ぐと見つめる彼の瞳は真剣そのものであり、キシシュタリアも僅かに緊張感を増した。だが――。

「互いの異聞帯<sup>ロストベルト</sup>に不干渉の契約を結びたい」

「……………」

「無論、最終的に互いの異聞帯<sup>ロストベルト</sup>が残れば、争わずには負えないが、それまでは両者に一切

の干渉は無しと言う事だ」

ウイリアムの提案にキリシユタリアは表情には出さないが、内心では唾然としていた。何を当たり前のことを、と。

元々、クリプターには他の異聞帯ロストベルトへの干渉が許されていない。唯一の例外は、異聞帯ロストベルトの拡大した領域が衝突したのみ、としている。

実際にそれを全員が守るか、と問われると疑問が残るが、わざわざこの場まで訪れて念を押すほどの提案でもない。

「……ああ、それで構わないよ。私と君、最後に唯一残る異聞帯ロストベルトがそのどちらかであれば良い、と言う事だろう？」

割と本気で困惑しているキリシユタリアであるが表面上は取り繕い、ウイリアムの提案に了承した。

そして、キリシユタリアの返答に満足そうに笑みを浮かべたウイリアムは、用意された席から立ち上がり、彼の元へ歩み――。

「なら、これからもよろしくな。キリシユタリア」

ウイリアムは令呪の刻まれた右手――ではなく、左手を差し出し握手を促す。その姿に、ようやくキリシユタリアは彼の真意を悟り、大きく目を見開いた。

「――君は……その為に……いや、その為だけに此処に……」

他のクリプター達も本質を知らない。Aチームとして発足した際、人より少しだけウイリアムと過ごす時間のあつたキリシユタリアだけが知る。

それは、現代でウイリアム・アードリックにのみ許された魔術——否、それは大いなる神秘の断片。

伸ばされた掌、それにキリシユタリアはゆつくりと自身の手を重ねた。

すると僅かに一瞬、注目していてもなお見逃すような微かな光がウイリアムの左手の甲から放たれた。

側から見れば彼等は、さして意味もない契約を結んだ者達にしか映らない。

キリシユタリアを注視しているはずの「異星の神」ですら、その行動の意味を理解することは無かった。

「——ああ。成る程、な」

少しばかりの黙考の後、ウイリアムは納得したように小さく呟き、その左手を離した。  
「……用件は以上だ。また何かあれば、報告する」

それだけを述べ、ウイリアムはキリシユタリアから背を向け、歩き始める。

（——そうだな、これぐらいは伝えおくべきだな）

そのまま部屋を後にするかに見えたウイリアムだが、ふとある事を思い立ち出口の直前で足を止めた。

「キリシユ」

呼んだ事の無い愛称で彼を呼び、振り返る事なく口を開く。

「お前のおかげで救われた命が確かにある。お前の旅路に感謝を。そして途中で脱落して、すまなかつた」

推察ではなく、ハツキリとした確信を込めてウイリアムはその言葉を告げた。その言葉にキリシユタリアは小さく首を振る。

「いや、むしろ助けられて来たのは私の方だよ。ウイイル」

キリシユタリアは、心の底から穏やかな表情で感謝を述べた。

それは、実態なき夢。キリシユタリアのみが秘めた幻想であった。それでもあの旅路は彼にとって紛れもない現実だったのだ。

例えウイリアムに実感が無かつたとしても、思い出が共有されるのは非常に嬉しい。「ウイイル」

頬を掻き少しだけ恥ずかしげに去って行くこうとするウイリアムの背に、キリシユタリアはならば此方もとばかりに呼び止める。

「おいっ！ 小つ恥ずかしいんだから、いい加減に——」

「君も気づいているだろうが、彼女もある程度知っている。かの魔眼が私と異星の神との間で交わされた会話を見たようだ」

キリシユタリアの言葉に文句を述べようと振り返ったウィリアムは少しだけ動きを止めてしまう。

（ああ、そうか。だから、呼び方が変わって——）

「安心したかい？」

片目を閉じ茶化すように尋ねるキリシユタリア。

もはや、ほとんど素を晒しているかのような彼の態度にウィリアムはため息を吐きながら、今度こそ背を向けた。

「……安心も何も、俺には関係は無い事だ」

「ふふ、そうか」

それだけを最後に、今度こそウィリアムはその場を後にし、自身の異聞帯ロストベルトへと戻って行った。

「……………」

しかし、その場で初めから見ていた銀色の肌の女。// 異星の巫女 // の存在に、二人は気づく事は無かった。



ロストベルト

異聞帯の中心地では、海から天を貫く漆黒の巨木が暗黒の空へ向け、大きく枝を広げていた。その横にある島に築かれた巨大城。そこが、異聞帯の王の居城である。

『首を垂れよ。王の御前である』

玉座の脇に立つ大神官の声音に従い、王に服する者たちが跪き、首を下げる。ウイリアムも室内の端で同様の体体勢を取り、王の登場を待つ。

『よくぞ集った。我が同胞達よ』

現れた王は玉座にどっしりと座し、手に持っていた王杖を大神官に渡す。

その姿を見て、最古参の配下である緑色の肌を持つ巨竜が口を開いた。

『息災で何よりでございます。我らが王——』

それは、時計塔の考古学<sup>アステア</sup>科でも議論の別れる存在。最古の古代神話『ドラゴンクエスト』の第一章で登場した巨悪。

「ロトの血を継ぎし者」に敗れる筈だった者。その成れの果て——。

『——神竜<sup>しんりゅうおう</sup>王様』

アフリカ異聞帯改め——アレフガルド異聞帯の王である。

## 第4話「偽りの主従」

アレフガルド異聞帯の王——  
しんりゅうおう 神竜王。

幻想種の頂点である竜種の王。そして最古の時代、“魔物”と呼ばれた幻想種の大群を率いて最初の人類文明の一つであるアレフガルドへと侵攻した“魔王”である。

汎人類史では、“ロトの血を継ぐ者”と呼ばれる一人の勇者に敗北した魔王であったが、この異聞帯ロストベルトで勝利したのは魔王の側であった。

そして、神を喰らい自身の名を改めた王は、数千、数万という年月の間、アレフガルドの完全統治を果たしていた。

『ウイリアムよ。以前に述べていたカルデアなる者が現れたのは間違い無いのだな』

玉座に座る王は地の底から響くような声音でウイリアムに尋ねる。玉座から見て長い階段の下のフロアで跪いているウイリアムは領きながら王の問いに答えた。

「はい。現在はおそらくロシアの異聞帯ロストベルトに上陸している筈です。すぐさま、此方の世界に来るといふ事は無いと思われませんが、警戒は必要かと」

『——だが、そのカルデアの本拠はクリプター貴様等が叩いたのだろうか？ たかだか数人の生き



残りに何が出来る』

紫色の皮膚を持つ巨竜がウイリアムの提案に疑問を呈する。

「それは、驕りですよ。陽炎竜王。ようえんりゆうおう 彼等は一度、世界を救っている。いわば、現代の勇

者とも言うべき存在です」

『——勇者、か』

神竜王はウイリアムの言葉を受け、それだけを呟く。

「……それに、我々の現状の脅威とも言うべき抑止力による刺客。時代を越えて召喚される英霊達と契約をする術を持っています。もし彼等と徒党を組まれれば、幾ら『六大竜王』と呼ばれるあなた方でも——」

『人間の英雄如きが、我々を揺るがすとてもほざくつもりか?』

神竜王の力の一部を譲渡された六体の竜種。その名も六大竜王。

その中でも別格の力を持つ、黒き飛竜がウイリアムの言葉を遮った。威圧の伴った声音を向ける飛竜に、ウイリアムも鋭い視線を向けるが——。

『——止せ』

王の僅かに低くなった声音に、ウイリアムも黒き飛竜も殺気を解き、玉座へ向けて姿勢を戻す。

『勇者——否、人の可能性を儼はよく知っておる。ゆえに、ウイリアムめの憂慮にも理解

を示そう。よって、カルデアがこの地に現れた暁には、総力を持つて滅ぼそう。だが今は、我が城の周囲を羽虫のように飛び交う英霊共の掃討が先決である』

一瞬だけ巨城の外へと目を向けた神竜王は、階下にいる配下へと視線を戻し命令を告げる。

『——六大竜王よ。引き続き、自身の領地にて我が世界に仇なす蛮族を討つのだ』

『オオオオオオオ——』

『!!!』

神竜王の勅命に、六大竜王は大地が震えるほどの咆哮で応じ、玉座から退城する。翼を飛ばたかせる者や大地を踏み揺らす者。その一体一体が、巨大な体躯を持ち、絶大な魔力を帯びている。

これまで幾人もの英霊が彼等に挑み、敗北した。神竜王が誇る無敵の将である。

室内の大部分を占拠していた六大竜王達が去り、階下にはウイリアムのみが残ったため広々とした空間となった。跪いたまま残ったウイリアムに神竜王が口を開く。

『空想樹の育ちは順調なようじゃな。ウイリアム』

「はい。最初期こそ、この地に根付くのに時間を要しましたが、陛下との接続を終えてからは他の異聞帯<sup>ロストバベル</sup>を上回る成長速度を見せています。異星の神の降臨も時間の問題でしょう」

ウイリアムが、この異間帯ロストベルトに降りた当初、空想樹はほとんど成長することが無かった。

理由は単純で、神竜王が外界より現れた空想樹の存在を拒絶していたからだ。

ウイリアムが、力づくで神竜王との交渉に持ち込み、“ある提案”をする事でようやく王は空想樹の存在を容認した。

『——だが、良いのか。ウイリアム？』

玉座の隣に立つ大神官がウイリアムを試すような口調で尋ねる。

『貴様は異星の神よりこの地に使わされたはず。だが、貴様が陛下にした提案はその神に反旗を翻すものじゃ。貴様に益が有るとは思えんぞ』

大神官の言葉にウイリアムは室内に隅へと視線を向け内心で舌打つ。

『……………』

(チツ……………余計なマネを……………あの“巫女”が見てる前だろうが……………)

キリシユタリアとの邂逅以降、これまでになく自身の周囲に出現するようになった“異星の巫女”。異星の神の手先である以上、その監視の前で下手を打つわけにはいかない。

「……………前にもお伝えしたはずですが、大神官殿。私に命じられた事は空想樹を育て切る事のみ。その先の結末を決めるのは、陛下と異星の神です。ゆえに、私に二度目の生を与えた神に反旗を示した訳ではありません。ただ、有り得るかもしれない可能性を陛下に

述べたに過ぎないのです」

『クハハ、相変わらず口の回る奴じゃ』

ウイリアムの言葉に、大神官は揶揄いがいのある玩具を見るように笑みを浮かべる。異星の神と異星の王の間で板挟みにされているウイリアムの現状を理解した上で楽しんでるのだ。

『——ウイリアムよ。お主は、引き続き外界にいるカルデアの様子を常に把握せよ。先程はあのように言ったが、彼奴等が“勇者”であるのならば決して野放しにはせん。良いな？』

神竜王は勇者への警戒を示した。

はるか過去、ロストベルト異聞帯へとこの世界が分岐する事になった出来事が、“竜王”と呼ばれた者の驕りを消し去った。

「——御意。全ては、陛下の御心のままに」

『うむ。分かっておるのならば下がってよいぞ』

「では、失礼します」

『……………』

王の言葉を受け、ウイリアムもまた玉座の間を下がる。

部屋の隅に立つ、異星の巫女の姿を見るが相変わらず何の反応も示すことは無かつ

た。

◇◇◇

神竜王の巨城の外に出るため、ウイリアムは正面の大門を抜けた。

そのタイミングで、ウイリアムの服の内側からピンク色の小さな光が姿を表し、彼の頭に小突くように何度も衝突してくる。

「うっわー、マジでキンチョーしたー……って言うか、あんなヤバいのが集まるって聞いて無いんですケド」

ピンクの光が文句を発しながら散り、突如として褐色の肌の小さな体躯の少女がウイリアムの横に姿を現した。羽を生やしウイリアムの周囲を飛び回る彼女に彼は苦言を呈する。

「……はあ。暇だからと勝手について来たのはお前の方だろう。『サンデイ』」

「だって、テンチョーは船のメンテで忙しくて相手してくれないし、一人でこんな野蠻な土地を出歩いてたらフツーに危ないじゃん」

悪気もなく述べるサンデイにウイリアムは呆れる他なかった。

「つてか、普段は偉ぶってるウイリアムが王サマの前では縮こまっていたのはウケたな」

「……………此処にお前だけ置いて行ってやってもいいが」

「えっ……ウソウソ、ジョーダンだって！イヤ、ホントにつ。そんなんじや女子にモテないぞっ」

「……はああ」

焦つて弁明をするサンデイの姿に、更に大きなため息をつくウイリアム。玉座の間でも集いに神経をすり減らしていた彼にとつてサンデイとのやり取りは非常に面倒臭く感じるものであった。

そのまま、彼女の言葉をウイリアムが適当に流していると、城門の脇に立つ人影に二人の視線が止まった。

『——』

「やっぱ不気味なんですケド、アレ」

「……ああ、そうだな」

二人の視線の先、そこには竜を模した甲冑を着込んだ騎士が銅像のように佇んでいた。それを見て、あからさまに嫌がるサンデイに対してウイリアムは同情を含んだ目で「彼」を見ていた。

「……だが、今は物言わぬただの傀儡だ。気にせず行くぞ」

「前来た時は、ハデに攻撃してきたのに、今は音沙汰無しかイミ分かんないんですケ

ド

「あの時は、俺たちが陛下の敵として認識されていたからだ。傘下となった今は、もう襲つてくる事は無い」

かつて竜神王との交渉を行うために、ウイリアムはキャスターとライダーを連れてこの居城へ乗り込んだ。その際に、立ちはだかつたのが門番である“彼”だ。

神霊サーヴァントに等しい力を持つキャスターであっても、押し込まれる相手であり、結果的にサーヴァント二騎とウイリアムの力を合わせる事によつてようやく無力化をする事が出来たのだ。

あまりに規格外な相手であつた。もう一度、勝てるかと聞かれたら簡単に頷くことはできない。

「……さつさと行くぞ」

「は〜い」

佇んだままの騎士からウイリアムは視線を切り、サンデイを呼びかける。素直に従つた彼女は再び小さな光となり、ウイリアムの懐へと収まる。

それを確認したウイリアムは、自身の拠点である地点を正確にイメージしながら一小節の詠唱を唱えた。

【飛翔せよ】

詠唱を終えた瞬間、身体が風に包まれ重力から解き放たれる。

ウイリアムの肉体は上空へと一気に舞い上がり、目的地へ向けと飛び立った。

現代では古代魔術エンシェントと呼ばれる実現不可能な魔術を、ウイリアムは限定的ながら行使することができるのであった。

『――』

一人、門の前に残された甲冑の騎士は、空へと羽ばたいて行った人間の姿を呆然と見つめていた。その行動に意味はない。なぜなら彼の思考や記憶は、神竜王の呪いにより奪われているからだ。

彼に残されているのは、規格外の戦闘力と記号のような個体名のみ。

それでも、何故か。

ウイリアムの背中に、彼は懐かしさに似た何かを感じていた。

魔剣に堕ちた聖剣を腰に揺らしながら、“闇の戦士”は彼の姿が消えるまで空を眺め続けていた。

◇◇◇

『陛下。恐れながらウイリアムめは本当に信用ができるのでしょうか？』



玉座の間に残された大神官は、座したままの神竜王に尋ねた。

『ふむ。お主はどう思う。〃ハーゴン〃よ』

『……アレは〃人間〃でございます。なれば信用などすべきではありませんぬ』

神竜王はハーゴンの答えに満足そうに笑みを溢した。

『——ああ。それで良いぞ。儂もあの男をカケラとて信じておらぬ』

神竜王が思い浮かべるのは、ウイリアムの瞳。

体は跪き、言葉では畏敬を示しているが、その目には爛々と野心が見え隠れしている。

『だが、あの男は儂に仕えるために相応の代償を払っておる。だからこそ今は、その代償に報いておるだけに過ぎん』

神竜王がウイリアムを傘下に置く際に課した条件。それを彼は、ほぼ全て飲んだ。ゆえに、城に迎えることを決めたのだ。

『それに、あの男にはまだ利用価値がある。特に外界や異星の神については、あの男の持っている情報が必要だ』

空想樹の根付きが遅かったこと、クリプターであるウイリアムとの接触が遅かったこともあり神竜王達は、異星の神や空想樹に関する情報が乏しい。

ゆえに、ウイリアムの存在は未だ欠かすことができないのだ。

『だが、全てを終えた時には——』

「つてか、あんだだけハデに攻め込んでおいて王サマのパシリになるとか、ウイリアムつて何がしたいワケ？」

「アレは、王が明確化しなければ異聞帯ロストベルトが安定しないからな。そのための、一時的な措置に過ぎない」

目的地の前に着地したウイリアムはサンデイの疑問に応えてゆく。

「分かりきった事だが、竜種である神竜王では人類史は築けない。何より俺の目指す世界は、こんな暗闇に満ちた場所ではない」

呪文を使った影響で僅かな光を放つ左手をウイリアムは掲げた。

「だからこそいずれ、王は本命にすぐ替えるつもりだよ」

人の未来を切り開き、新たな人類史を築く。それが、クリプターとなった自身の最低限の責務。

「そして、そのためにも——」

両者が見つめる先。両者の抱く終着点を奇しくも同じものであった。

『あの男は、儂の手で殺してやろう』

「——あの王は、俺の手で殺す」

偽りの主従が、  
此処に一つ。

## 幕間の物語① 「流離（さすらい）の剣士（セイバー）」

アレフガルド異聞帯の南西部は、広大な砂漠地帯である。

かつてはドムドーラという活気溢れる街があったのだが、竜王によるアレフガルド侵攻により「最初に」滅ぼされたのがこの街であり、今はただの砂に埋もれた廃墟がチラホラと見えるだけとなっていた。

そんな荒廃した土地を、一人の剣士は歩いていた。

銀髪の彼は、抑止力よりこの異聞帯ロストベルトに対処するために遣わされた汎人類史のサーヴァントの一人である。

「……此処が、六大竜王とやらの根城か」

夜の砂漠に吹き抜ける冷たい風が廃墟の間を抜けるなか、一際大きな廃墟の目の前で剣士は足を止めた。出入口の砂も除かれており、明らかに何かが入り出している様子が見える。

剣士は腰に収まる愛剣に手をかけながら、魔の気配を感じる室内へと足を進めるが――

「——ッ!」

突如、轟音と共に面前の壁が破壊された。

そして、その場所から一体の大きな竜種が剣士へ向けて飛びかかってくる。

『また……来たのか……人間ッ——!!』

「——チッ! 魔物のくせに不意打ちとはなッ!!」

力強く振り下ろされる大斧に、剣士は瞬時に反転して回避する。

距離を置き改めて相手を観察した剣士であったが、自身に斧を振るった思わぬ竜種の姿に驚愕する。

「——お前は……『ドラング』か?」

『それは……陛下が……つけた名前……人間が気軽に……呼ぶな——ッ!!』

咆哮するバトルレックスは、力強く踏み込み砂煙を巻き上げながら剣士へと接敵した。

彼女こそが六大竜王の一角、伏魔竜王ふくまりゆうわうドラングである。

『人間……! 死ねッ——!!』

「……ッ! 『はやぶさ斬り』!」

はやぶさのように振られる大斧を、剣士もまた一息の間に二つの斬撃を放つことによつて相殺する。だが、リーチに勝る大斧が僅かに剣士の両肩を掠めた。さらに押し込

もうとするドラングは、大斧を大きく振り上げた。

『ガアアアア——ッ!!』

「チツ……!!」

魔神の如く振り下ろされる斬撃を、剣士はギリギリで回避しながらドラングへ向け声を上げる。

「話を聞け!ドラングッ!」

『ふざけるな……人間ッ!!——これでも……くらえッ!!』

「クツ……!!」

斧を旋回させドラングは砂嵐を巻き上げる。そして、炸裂するような響音と共に砂塵を纏った真空の刃が放たれた。

小盾を構え受け止める剣士であったが、多重に迫る風に体制を崩され、背後の建物に吹き飛ばされてしまう。

吹き飛ばされた先、崩れた瓦礫に埋もれながら剣士は、どこまでも広がる暗闇の空を見上げた。

(——あの時以来か……お前とこうして剣を交えるのは)

剣士が思い出すのは、彼がまだ流離さすらいの剣士と呼ばれていた頃の記憶。

ただ強くなることに必死だった。周りのことなど何も目に映らなかった。大切な姉がすぐ近くにいたのにその存在にも気づかないほどに。

だからあの時、自身の前に立ちはだかった魔物を迷いなく斬り伏せた。

その事に後悔なんてなかった。魔物の事情になんて興味もなかった。なのに――

『待っていた……おまえ……青い人間。おまえ……ワタシ……打ち負かした。ワタシ……おまえ……ついて行く。それ……負けた者……運命……ついていって……いいか？』

ひよんなことからドラングは生き返り、彼等の仲間となった。

共に立ち、共に肩を並べ、共に背中を預けた。そうしていつの間にか、かの竜とは種族を越えたかけがえの無い仲間となった。

例え、その過去を、その記憶を持っていない相手だとしても、なんの躊躇いもなく斬ることは出来ない。

「――ああ、そうか…… “姉さん” もこんな感じだったのか」

自分にとって最も大切な存在である姉。

彼女は、自分が魔王の手先になり立ち塞がった時にどう思ったのだろうか。

きつと辛かったはずだ。とても苦しかったはずだ。

(——すごいな、本当に)

彼女は、その仲間は、愚かな自分に真正面からぶつかってくれた。そして最後には、暖かな手を差し伸べてくれたのだ。

(——オレに出来るか？アイツらと同じことが)

自分のためではなく、誰かのために戦う。

高めるためではなく、救うために勝つ。

孤独な剣士でしか無かった自分には、経験のない在り方。

だが、彼等と出会い共に歩んだ自身なら——。

(——分かつてる。独りでいる事が強さではない、誰かを助けられる者こそ本当の強さを持つている。そんなものは痛いほどよく分かっている)

彼等との短くも濃い旅路で学んだ。本当の強さが何かを。

(——そうだ。その上でオレは誓ったんだ。最強の剣士になる、と) 未だ道の途上。

それでも目指すべき方向は、もう知っている。ならば——。

剣を握り、立ち上がる。

ドラゴンから発する殺意を受け止めた上で、彼女に剣を向けた。



「お前は、かつて言ったな。敗者は勝者に運命を委ねると」

『何を……言っている……人間ッ……!?!』

剣士の物言いに困惑するドラング。

「人間、ではない。オレにもお前と同じように与えられた名がある」

牙を剥くドラングに、決意と覚悟を持った面持ちで剣士は宣言する。

「オレは剣士セイバーのテリー。今日お前に二度目の敗北を刻む、最強の剣士だ」

宣戦と共にテリーは疾駆する。

受けに達していた先程とは比較にならない速度にドラングは驚愕する。

『ッ——!?!』

『行くぞー! 『ドラゴン斬り』ッ!!』

助走を維持したまま跳ねたテリーは、その勢いのまま炎を纏った刃をドラングの直上から振り下ろす。戦バトルアックス斧で受け取るドラングだが、テリーの斬撃は勢いを失う事なく彼

女の得物を押し込んだ。

「ハアアアア!!」

『クッ……!?!』

テリーの発する力に、ドラングは本能的に後退する。

たった数歩。ほんの短い距離であるが、人間を相手に生まれて初めて引き下がった。

『何を……何をした……人間ッ——!?!』

自身の中に芽生えた恐怖感情をドラランゴは理解できない。

竜は何も恐れないはずなのだ。何故なら、恐れるような対象がこの地には存在しなかったのだから。

『ガアアア——ッ!!』

そんな感情を否定するかのように咆哮を上げ、ドラランゴは燃え盛る息吹ブレスを吐き出した。

対するテリーも剣を大きく構え迎え撃った。

「【真空斬り】!!」

振り切った斬撃と共に放たれる真空の刃が、迫り来る炎の海を真つ二つに切り裂いた。炎の間に生まれた一直線の道へ向けてテリーは引き絞るように剣を構える。

「——視えた。【疾風突き】!」

『ガ——ッ!?!この……人間風情が……ッ!』

一切の反応を許さない速度で放たれた一閃がドラランゴの喉元を捉える。

さすがのタフネスか、その一撃を持つてしてもドラランゴは勢いを落とさない。

無理矢理振われた斧の斬撃を躲しつつ、テリーは一瞬だけ周囲へ意識を向ける。

「——あまり、悠長に戦ってはられないな。魔物共が、この騒ぎに嗅ぎつけて集まって

きてやがる)

周囲に次々と現れる魔の気配。

今は遠巻きに此方の様子を伺っているだけだが、ドラングと合流されてしまえばさすがのテリーでも厳しい。

(ならば、早急に決着をつけるまで……!)

テリーはその場で足を止め、自身の愛剣を天にかざす。膨大な魔力が彼の掲げる剣を中心に周囲を渦巻いた。

「——この一撃で、お前を倒す」

刹那、雷光が迸り、彼の持つ“雷鳴の剣”に光が纏われた。

それは、かつて竜殺しを成したテリーにアークボルト王国が贈った宝剣。道具として使用すれば、何処であろうと雷を呼び起こすという代物であるが、セイバー剣士として現界したテリーはその雷光を剣技に昇華できる。

「宝具ッ!」アーク・オブ・ライトニング【雷鳴轟く閃光の剣】

極雷の如き轟音と閃光を伴い、雷光の斬撃が放たれる。

迫る斬撃を前に咄嗟に防御の姿勢を構えるドラングであるが、すぐさま自身の力のみで防ぐ事が不可能であることを悟る。

『——認める……お前……強い』

ドラングは、そう眩き防御の構えを解く。

しかし、彼女の浮かべる表情は諦めた者のそれではない。

『だから……ワタシも……全力……出す』

咆哮と共に、彼女の胸の中心に埋め込まれた緑色の宝玉が光を解き放った。

『——【妖魔の吸魂】』

「いったい何を……!?!」

ドラングの口から唱えられたのは短文の詠唱。

その瞬間、光の斬撃が魔力の粒子へと姿を変えてゆき、ドラングの胸にある宝玉へと吸収されてゆく。魔力を奪われ勢いが減衰した斬撃は、彼女に到達する頃には完全に力を失っていた。

それだけではなく、テリーの宝具により多大な魔力を得たドラングは、自身に刻まれた損傷を修復していく。

「……それが、神竜王とやらから与えられた力か」

テリーは自身の知っているドラングが持ち得ない能力を目にし、そのように当たりをつけた。

『その通り……陛下が……ワタシ……認めてくださった……その証』

肯定するドラング。

六大竜王は、神竜王の力の一部を封じている宝玉オーブをその身に宿しており、その力の一端を行使する事ができる。

緑色の宝玉グリーンオーブに封じられた力。それは、凡ゆる魔力に干渉する力。他者の魔力を糧とし己の力を増強させる事ができる。

ゆえに伏魔竜王ドラングには、凡ゆる魔術や魔力による攻撃は通じない。

『まだ……あるか……人間……？』

「――。」

『……そうか』

ドラングの問いにテリー唖を閉したまま何も答えない。

彼の様子ドラングは少しだけ失望したように得物を構えた。

『これで……終わりだ……!!』

「――俺に出来るのは、やはりお前に勝つことだけだ。なら、迷うべきではないな」  
テリーの呟き。

それは、どこか決意にも聞こえる呟きであった。

彼が切ろうとしているのは真正銘の奥の手。ドラングに神竜王から与えられた力という切り札があつたように、テリーもまたまだカードを残していた。

だが、それを切るのは決して本意ではない。それは、愚かな力に溺れた自身を晒すこ

とに他ならないから。

それでも躊躇わない。これは初めから、自身の力を証明するための戦いではないのだから。

テリーは奥の手、第二宝具の名を告げる。

「——【オックス・デユラン魔人の誓約】」

瞬間、ドラングの斧が弾かれた——否、その巨大な体躯ごと後方へ吹き飛ばされた。廃墟へと叩きつけられるドラングは自身に何が起きたかを理解できていない。

『——がッ……な……何が……?!?』

「決着を着けるぞ、ドラング……!!」

膝をつくドラングが見たのは、紅く染まった瞳で此方に宣言するテリーの姿。彼の周囲には紫色の禍々しいオーラが纏われていた。

テリーの第二宝具。

それは、かつて魔王デユランに魂を売り、力を得たというテリーの逸話から生じたもの。自身の霊基を燃やすことによってもたらされる一時的な強化。

テリーは力強く砂地を蹴り上げる。その一歩だけで地面が陥没し、弾丸の如き速度でドラングへ接敵する。

爆発的な強化率であるが代償もまた大きい。この戦いが終わった時、彼は——。

「ハアアアアア!!」

『——ガアッ!』

周辺の廃墟や集まってきた魔物を巻き込みながら、ドラングへと攻勢を続ける。凄まじいテリーの動きに反応ができないドラングの身体には次々と斬撃が刻まれてゆく。

圧倒するテリーだが、彼の側にも決して余裕はない。

（——身体が内側から崩れそうだ。だが、まだ……まだだ）

次第に崩壊を始める自身の霊基を感じ取りながら、決着の一撃を決めるために、雷鳴の剣を上方へ構えた。

その姿は、先程の宝具【雷鳴轟く閃光の剣】アーク・オブ・ライトニングと同じものであった。

『それは……やらせない……【妖魔の吸魂】!!』ギガ・マホトラ

テリーの動きを見越して先んじて緑色の宝玉グリーンオーブの力を展開するドラング。緑色の光が周囲を照らすなか、テリーは攻撃を続行した。

「行くぜッ!!」

周囲に迸ったのは先程とは違う紫電。

先程の宝具とは比にならない程の魔力を帯びた紫の雷光が輝く。その膨大な魔力を剣尖と共に解き放った。

『——【奈落の閃雷】ッ!!』ジゴスパーク

迫る紫電の斬撃。

その多量の魔力も緑色の宝玉へと吸収されてゆく。だが――。

『なんだ……この……魔力は――ッ!?!』

魔力を吸収してなお、勢いの止まらない斬光。迫り来るそれにドラングはただただ驚愕するほかなかった。

テリーの己の霊基全てを燃料とした一撃は、神竜王の権能を持つてしても吸収し切る事が出来ない。

周囲の廃墟をまるまる巻き込む程の斬撃をドラングは正面から喰らった。

「――はあ、はあ……」

斬撃の収まり土煙が立ち登るなか、テリーは息を絶やしながら佇んでいた。瞳もいつもの紫色に戻った彼であるが愛剣は半ばで折れており、その霊基も既にボロボロで、もはやその場に存在する事がやつとの状態となっていた。

土煙が晴れ、血塗れになったドラングの姿が見えたテリーは引きずるように足を進め、彼女のもとへ向かおうとしたが――。

(せめて……最期にあいつと話を――)

『――ようやくスキを晒したな。魔に自らを差し出す剣士よ』

不意に、テリーの背後から新たな魔性の気配が現れる。



咄嗟に振り返ろうとするテリーだが、間に合う事なく隙だらけであった背中を穿たれた。

「クッ……!!」

ドサリと倒れ込むテリー。どうにか顔だけを横に向け、自身の不意をついた相手へと視線を向ける。そこにいたのは白のローブを纏い杖を持つ魔族。

その姿を見たドラングが身体を引きずりながら近寄り、現れた魔族の名を呼ぶ。

『ハ……ハーゴン……』

『まさか、六大魔王の一角である貴様がここまで追い込まれるとは、少しばかり失望したぞ』

大神官の物言いにドラングは何も言い返す事ができないが、そんな様子に気に留める事なく倒れ伏すテリーへと目を向けた。

『貴様もほとほと無様よな、人間。凡人類史で此奴とどのような因縁があったかは知らぬが、この世界は竜の世界。竜に育てられ、竜と共にのみ生きてきた此奴にどれほどの言葉をかけようという意味はない』

「そんなこと……初めから、分かりきっている」

どれだけ姿や存在が同じでも、歩んできた道のりが違う。彼女はドラングではあるが、テリーの知っているドラングではない。そんな事は分かっている。

それでも——。

「——それでもオレは、手を伸ばす。それだけが、アイツらに、お前に報いる手段なんだ。だから、オレは——」

『もう良い。貴様等、人間の頑なさは理解できん』

テリーの意識を刈り取る事によつてハーゴンは強制的に彼の言葉を遮った。呆れたような視線をテリーへ向けるハーゴンに、ドラングは声を掛ける。

『あの……人間……何か……言おうとしてた』

『所詮は人間の戯れ事だ、貴様の気にすることではない』

『……けど——』

『それとも、貴様も奴に絆されて同じ末路を辿るか？この地の他種族と同じ末路を』

ハーゴンの問いに首を振るうドラング。

ドラングは実際に見た事はないが、歴史として知っている。竜王と呼ばれた王の蹂躪を。このアレフガルドの地にかけて存在した凡ゆる種の滅びを。

この地には、一部の例外を除き竜種以外の生命が存在しない。神竜王が同胞以外の種族を全てを喰らったからだ。

だからこそ、神竜王の配下にも彼等と同じ末路への恐れがあった。

『……ならば良い。早急に傷を癒やし新たな刺客に備えよ』

それだけを告げ、ハーゴンは杖を振るい空間を転移した。

残されたドラングは膝をつき、意識を失った彼の身体を揺さぶる。しかし、既に限界を迎えていたテリーは目を覚ます事はできない。

『……なんで……起きない……お前は……強いはず……なのに——』

自分が何故このような行動を取っているのかドラングは理解できない。それでも手を止める事はできなかった。

『ワタシ……負けた……お前に……負けたんだ……』

感情が溢れてくる。

正面からぶつかってきた彼を、もっと知りたくなかった。もつと話してみたくなかった。

殺伐とした魔物達同胞とは分かちあえない思い。今まで知りもしなかった感情が雫となつて零れ、テリーの頬に落ちる。

『あ……』

その瞬間、サーヴァントとして現界したテリーの身体が魔力の粒子となる。目の前で失われようとするそれに、ドラングは手を伸ばすが何も掴む事ができない。

『……テリー』

ドラングの小さな呟きは、暗黒の空に溶けていった。

これは、一人の剣士と一体の竜の物語。

クリプターであるウィリアムや後にこの地を訪れるカルデアも知る事がなかった。彼女が最後の瞬間まで自分の胸に秘した物語である。